

## 家族と教師による高校生の教科選好への影響

室 雅 子

Influence of Students' Preference for Subjects Produced by  
Family Members and Teachers

Masako MURO

### 1. はじめに

生徒は学校で学習する教科に好き嫌い感を抱いている場合が多い。高校生の進路選択時には、教科の好き嫌いを文系・理系や進学学部、職業などの選択の判断基準にする者もある。この大きな選択にも影響する教科への好き嫌い（以下「選好」と呼ぶ）は個々で異なるものである。

教科に対する選好が生じる理由というと学校内での事柄が想起されやすく、その中でも問題にされるのは学校内での教員や学校の教え方である。一人でも多くの生徒に内容の理解をさせ、関心を高める内容の改善をと努力する姿はよく見られる事柄である。教師の影響の例として「同一視」を学習動機付け要因としてあげた湯川<sup>1)</sup>や「親和の手がかりの程度」に着目した河野<sup>2)</sup>の調査によれば、同一視や高親和の教師に接した生徒のほうが、そうでない生徒よりも家庭科を好んだり、好意度が高かったと報告されていることから、教師の影響は少なくないだろう。

しかし学校での学習自体は、形式としては国の定めた学習指導要領の元にほぼ同一の内容を教わるシステムになっており、授業も一斉指導であれば同一の内容を同時に受講しているはずだが、ずっと同級生であっても個々に選好の違いは生じる。個人の先天的な能力差、個人の能力と学校の進度とのギャップによる落ちこぼれ、教師の教え方や能力による違いなども影響としては有力な説であると考えられるが、いずれも根本では個人の能力を伸ばすべく働きかけているものが問題である。そしてその働きかけている要因を、好きか嫌いかを問題にするときには学校内だけに求めるのは限界がある。では個人の先天的な能力差と学校以外の要因とは何か。

実際に「なぜその教科が好きなのか、または嫌いなのか」と聞くとき、「小さいころからあまり興味がない」「小さいころから好き」など、小学校就学前をさすと思われる返答が来ることがある。それは親が家庭で、何か教科に関する内容を意図・無意図を問わず教えていたことを意味する。就学後の生徒であっても学校外、特に家庭で過ごす時間も短くないことを考えると家族の影響は無視できない大きな要因であると考えられはしないか。

家族の子どもへの影響としては、東ら<sup>3)</sup>によれば「環境内の言語的刺激や母親のコミュニケーション・スタイルにおける表現の豊富さ、多様性などの言語的要因」「子どもに対する受容的態度や配慮」「子どもの発達への高い期待、特に学校関係スキルや言語主張への早期期待」などが子どもの知的発達に関係していると報告されている。また、母親の子どもに対する教授スタイルが直接指示ではなく間接アプローチであったり、表現が多様であったり、階層が高かったり、言語活動が多様に行われていたりしていると、子どもの知的発達に対してプラスに関係するという結果も報告されている。親・家族の働きかけはその後の生徒の動機付けや方向付けに何らかの影響を与える可能性が考えられる。

ゆえに教科の選好に与える影響要因は学校だけではなく家庭にも求める必要があると考え、本研究では家庭と教師による教科選好への影響度合いと内容を明らかにし、家庭と学校と生徒との教科教育における連携について考察してみたい。

## 2. 研究方法

本研究では教科の選好に与える影響要因として「家族」「教師」を設定し、それ以外の補助要因として「教科自身の特徴（魅力）」を加えることとした。

調査対象者は愛知県内公立高等学校2校（A校一進学校・B校一中堅校）1年生。有効回答数は326。調査時期は1993年10月である。実施方法は無記名自記式の質問紙調査にて行った。

主な質問内容は、①自分の教科（英・数・国・理・社・技家・体・芸〈音・美・書・その他〉）に対する選好度、②自分の教科への選好度に対する家族の影響度と具体的内容、③自分の教科への選好度に対する教師の影響度と具体的内容、④家族・教師の影響を受けていない教科の好きになった理由、⑤好きな教科と得意な教科、嫌いな教科と苦手な教科の関係、⑥小さいころからずっと好きかどうか、⑦興味のあるものは飽きないか、である。

分析の視点は、(1)自分の教科の選好度と家族・教師の影響との関連、(2)家族・教師・教科自体の影響の特徴（自由記述より）とした。

仮説としては、

- ・家族員が家庭内の普段の生活から教科に関連する基礎や応用となる働きかけを意識的・無意識的を問わず、継続的に行うことによって、子どもは関連教科を好きになるまたは嫌いになる。
- ・教師の教え方や教師への好意・同一視からその教科を好きになる、または教え方や教師自身に反感や嫌悪感を抱き、嫌いになる。
- ・教科自身の特徴（解答がひとつである、解く楽しみなど）により、その教科に惹かれて好きになる、または嫌いになる。

以上3点である。

## 3. 結果および考察

### 3-1 調査対象者の概要

調査対象者の男女比は男：女＝48.5％：51.5％でほぼ1：1であった（図1）。A校・B

## 家族と教師による高校生の教科選好への影響

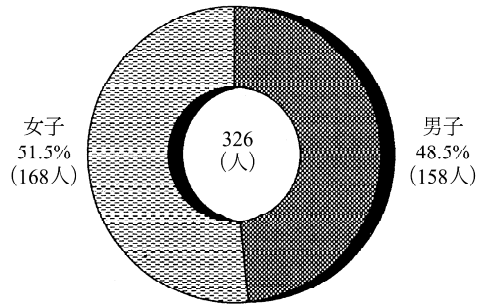


図1 対象者男女比

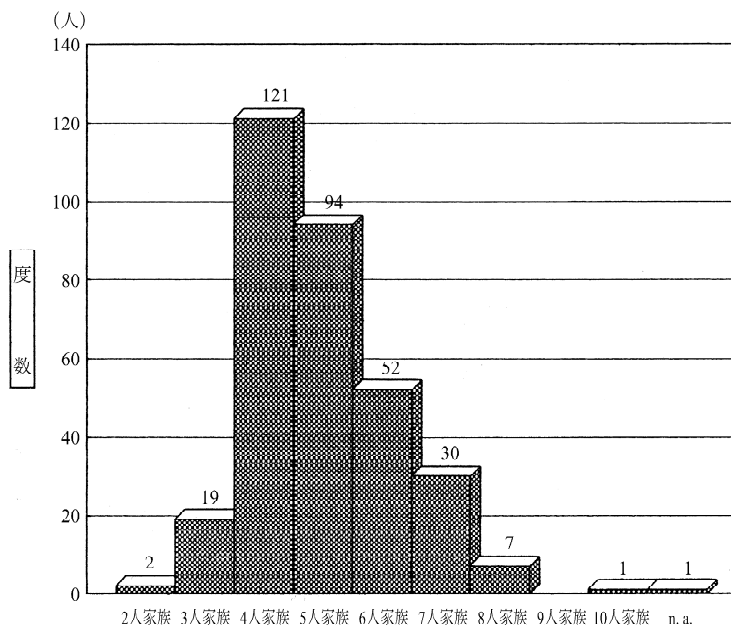


図2 家族人数

校ともにほぼ同割合である。家族構成は4人家族が最も多く、ついで5人、6人、7人、3人、8人、2人家族と続き、家族員の影響を受けることができる環境にすることが明らかである（図2）。

### 3-2 本人の教科の選好

対象者には「大好き」「やや好き」「普通」「やや嫌い」「大嫌い」の5段階で選好度合いを尋ねた。全体の選好割合は図3のように体育・音楽・美術以外は特に各教科に違いはみられなかったが、男女別に集計すると英語や国語といった言語教科と音楽は女子に、数学と理科といった理数系は男子に好まれ、逆に男子は国語、女子は数学・理科に嫌いな傾向を示していた。

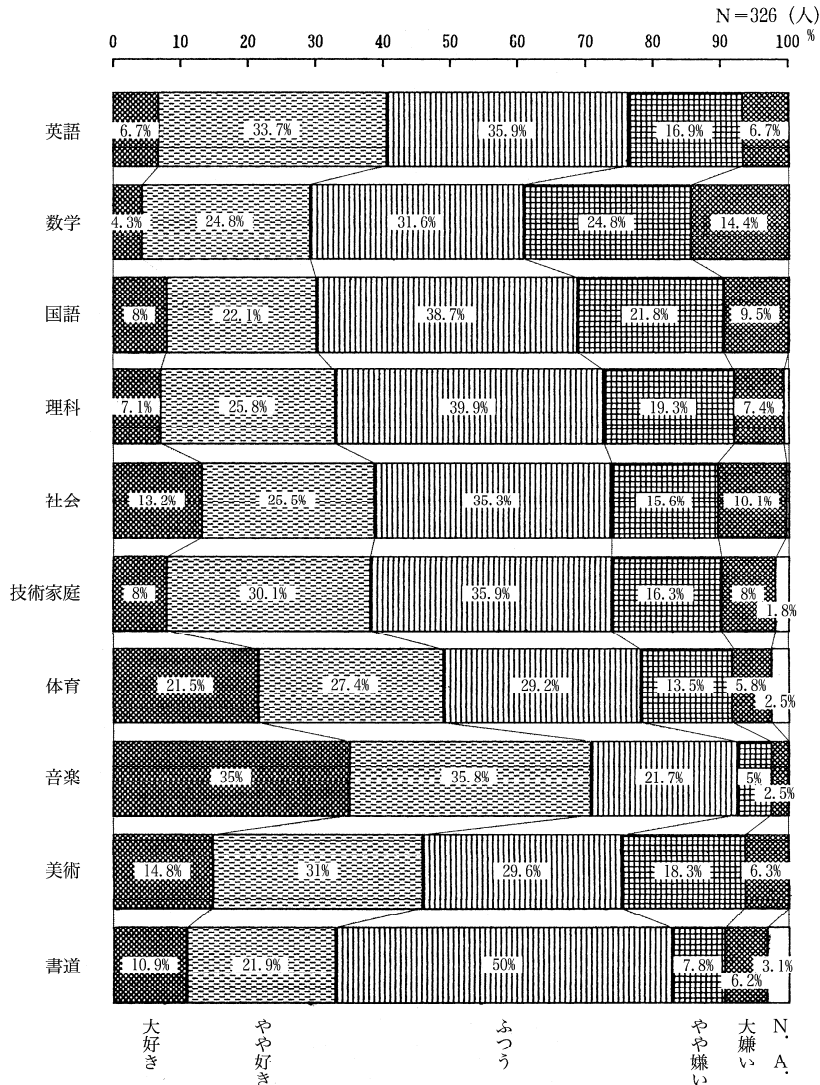


図3 本人の教科選好割合

「好きな教科は得意教科か」(図4)、または「嫌いな教科は苦手教科か」(図5)、という質問には、好きな教科が得意な割合は4割強、嫌いな教科が苦手教科な割合は6割弱で、好きな教科が必ずしも得意とは限らないが、嫌いな教科のほうが苦手教科である確率が高いことが示された。

「一番好きな教科はずっと好きだったか」(図6)という問いには6割が賛同し、また「自分の興味のある教科に関連した本・雑誌・番組は飽きないか」(図7)という問いには5割弱が「はい」と答えた。ここでは男女差はあまりみられなかったが、A校の方がB校よりも飽きない割合が高く、多少学校差が見られたものの、ある教科を好きになれば選好には持続性があり、かつ飽きさせないこと、結果的に学力レベルの高い生徒のほうが、より好

## 家族と教師による高校生の教科選好への影響

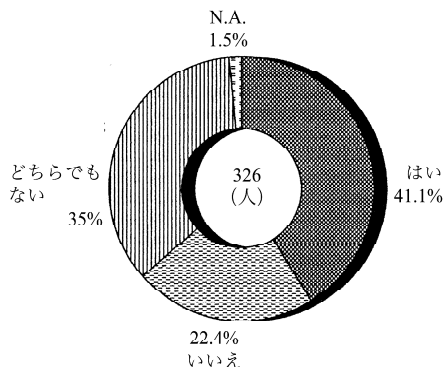


図4 「好きな教科」＝「得意な教科」か

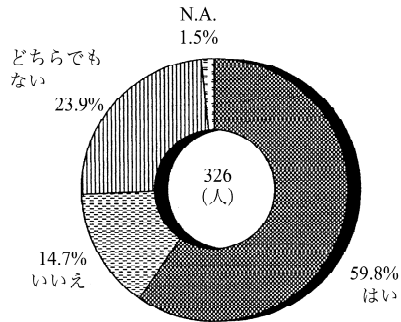


図5 「嫌いな教科」＝「苦手な教科」か

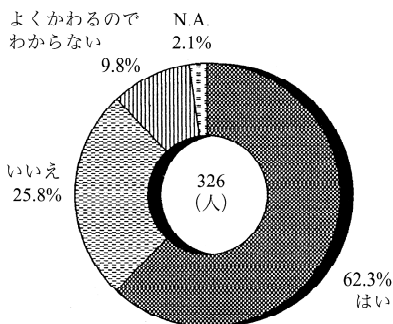


図6 一番好きな教科はずっと好きだったか

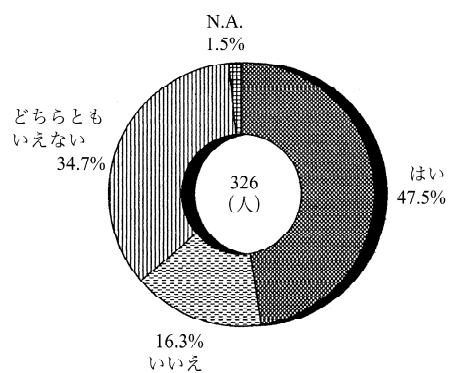


図7 興味のある教科関連のことは飽きないか

きな教科に対して飽きない集中力を持っていると回答する現状が明らかとなった。

これらの結果より、ある教科を好きになる教科が必ずしも得意教科になるとは限らないが、嫌いになってしまうと苦手教科意識が強くなること、好きになれば関連の事柄に対する取り組みに時間的な持続性があり集中力も出ることがわかる。飽きないとした回答が進学校に多かった事実からも、教科を好きになること・嫌いになることは、その後の学習意欲や成績向上・低下にも大きく関与している可能性があると考えられる。

### 3-3 教科選好度と家族の影響度との関連

実際に教科の選好には家族はどのような影響を与えているのだろうか。

#### I 関連の有無の傾向（性別）

自分の教科選好度と家族のその教科への影響度との関連をカイ2乗検定にて検定したところ、表1のように分布された。表1に現れた家族からの影響との関連には、好きになる影響と嫌いになる影響と両方混在しているが、全体的に見て女子のほうが有意な教科が多いことから、女子のほうが家族の影響を受けやすいといえる。またこれをクラメールの連

表1 自分の教科選好と家族の影響の関連  
(男女別)

	全男子	全女子
英 語		
数 学		
国 語	**	**
理 科	**	**
社 会		**
技術家庭	*	**
体 育	**	
芸 (音)		
芸 (美)		*
芸 (書)		

\*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$

関係数により関連の強い順に並べると

男子……体育, 理科, 国語, 技術・家庭

女子……美術, 理科, 社会, 国語, 英語, 技術・家庭

となった。男子の最も関連の強かった体育の主な理由としては、「昔よく一緒に遊んでくれた」というものであり、また他の理科, 国語, 技・家も「(親が) 何かを教えてくれたり、やってくれた」という理由が挙げられた。一方, 女子で最も関連の強かったのは美術であったが、これは主にB校の生徒による結果で、「家族の誰かが美術が得意である」という理由があげられていた。

他の科目においても、親の影響は具体的には親の行動や親の好き嫌いが主であった。たとえば挙げられた理由として親の行動と言えるものでは、

国語……「本を与えてくれたり、読んでくれた」

数学・理科……「教えてくれた」

社会……「よく社会の出来事を話し合う」

音楽……「習わせてくれた」「音楽のある環境だった」「家でよく音楽を聴いた」

などであり、親が直接その教科に関することが好きである場合もあるが、好きであるがゆえにその教科を教えてくれたり、その教科に関連するようなことをする、または関連のものが家にあるという「環境作りがなされる」といった行動につながっている。

逆に、嫌いにさせた理由には、親がその教科を苦手であるものがほとんどである。教科に共通して、たとえば「苦手な家系である」「親が苦手で教えてもらえなかったから」または「あまりに『その教科は難しい』と言われすぎたから」「日常にその教科に関連する行動がない」という理由があげられていた。

親以外の家族員の影響には、きょうだい・祖父母があったが、祖父母は親と立場がほぼ同じである。きょうだいは、兄弟の場合は親と同様の影響が見られる他、「比較されないようにこの教科をがんばった」「一緒にやった」「同じこと(塾通い・お稽古・楽器演奏など)がやりたかった」など、子どもとしての同等立場による影響、同一視がみられていた。

## II 学校差・男女差

学校・性別に見ると、表2のように学校差がみられる。検定結果上有意であったものを示したが、男子の場合、全体で関連が有意に認められた国語は両校、理科・体育はA校に関連が強くでていたためであることがわかる。同様に女子も国語・理科・社会はA校、技術家庭・美術は主にB校の影響であったとわかる。

## III 好きにさせる影響か嫌いにさせる影響か

これらの関連は果たして、教科を好きにさせる影響なのか、それとも嫌いにさせる影響なのか。表3は表2を影響内容記述項目数に置き換えたものであるが、どの項目も好きにさせる影響の方が嫌いにさせた影響よりも多くなっていることから、家族の影響は教科を好きにさせる影響を与えることを明らかにしている。

表2 自分の教科選好と家族の影響の関連（学校・男女別）

	A校男子	A校女子	B校男子	B校女子
英 語				
数 学	*			
国 語	*	*	*	
理 科	**	**		
社 会		**	**	
技術家庭		*		**
体 育	**			
芸（音）				
芸（美）				**
芸（書）				

\*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$

表3 家族の影響項目数〈学校別〉（有意項目のみ抜粋）（個）

	A校男子		A校女子		B校男子		B校女子	
	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い	好き	嫌い
英 語								
数 学	8	2						
国 語	6	3	24	0	7	1		
理 科	6	2	6	0				
社 会			16	0	7	1		
技術家庭			11	0			9	2
体 育	2	0						
芸（音）								
芸（美）							10	0
芸（書）								

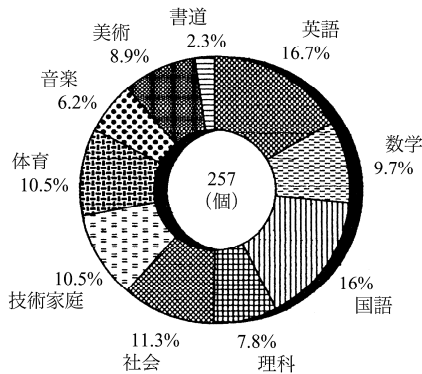


図8 家族の影響項目の教科割合  
(好きになった)

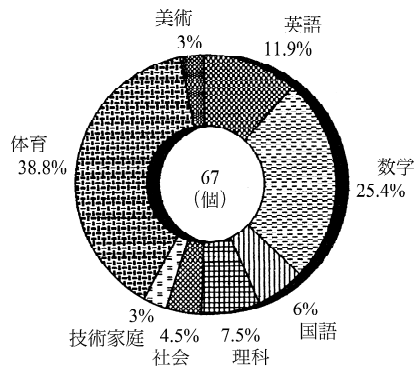


図9 家族の影響項目の教科割合  
(嫌いになった)

影響内容の全体的な記述割合をみても(図8, 9), 家族の影響で好きになったとする理由を挙げたものが257個, 嫌いになった理由が67個で圧倒的に好きになったとする理由を挙げるものが多くなっている。教科分布も, 好きになったとするほう(図8)は多少の数値差はあるものの各科に影響があり, どの科目も生活上の家族からのよい影響を受ける可能性を示しているが, 嫌いになったとするほう(図9)は教科の偏りが大きく, 家族の苦手意識や苦手発言などが特に数学と体育に大きく影響を与えることを明らかにしている。

#### IV 誰の影響か

影響を与えた人に注目すると, 教科によってやや特徴が見られる。(表4)

「国語」「音楽」「家庭」を好きになる影響を与えた人として母親が多くあげられ, 「社会」「体育」を好きになる影響を与えた人としては父親が多くあげられた。

逆に, 嫌いになる影響を与えた人として少し多めであったのは「体育」の母親の影響である。これは女子の回答で目立ったものであった。

全体的に眺めると, 女子は母親に, 男子は父親に, 良くも悪くも影響を受けているとされていることが項目数から明らかとなった。全体のなかで一番影響のあった教科は英語と体育であり, 国語, 数学がこれに続く。

以上より,

- ①家族の影響は教科を好きにさせる影響が多く見られる
- ②好きにさせる影響は各科に及ぶが, 嫌いにさせる影響は数学と体育に顕著である
- ③進学校の生徒には主要5教科とよばれる科目に影響が多く見られ, 中堅校には実技教科と呼ばれる科目に影響が多く見られる
- ④男子より女子のほうがより家族の影響を受けている
- ⑤男子は父親に, 女子は母親に影響をうけやすい傾向がある
- ⑥進学校の方が中堅校よりも家族の影響を受けている

が明らかとなった。この①～⑥から, 家族がその科目に関することが好きで何かを働きかけることが日常にあるとき, 教科を好きにさせるプラスイメージの影響(行動)が教科選好, ひいては教科学習に対するやる気の喚起や学力向上に大きな役割を持っていると考え



家族と教師による高校生の教科選好への影響

表4 家族の影響項目数〈家族員別〉

「好きになった」理由 (個)

	A校男子			A校女子			B校男子			B校女子		
	父	母	他	父	母	他	父	母	他	父	母	他
英 語	4	3	3	7	7	4	1	2		1	5	1
数 学	3	3	2	4	4	1	2	2		1	1	1
国 語	3	3		5	16	3		7			4	
理 科	5		1	1	2	3	3		1	1	1	
社 会	2	1		10	4	2	5	1		2	1	
技術家庭	1		1	1	9	1	3	2			9	
体 育	1		1	3	1	1	7	2		8		1
芸 (音)	1	2	2	2	11	6					2	
芸 (美)	1	2		1	1		3	2		2	5	1
芸 (書)	1	1		1				1			1	
計	22	15	10	35	55	21	24	19	1	15	29	4

「嫌いになった」理由 (個)

	A校男子			A校女子			B校男子			B校女子		
	父	母	他	父	母	他	父	母	他	父	母	他
英 語				1	2		1	2	1			1
数 学	2			3	4	3		1		1	1	2
国 語	2	1						1				
理 科	1	1								1	2	
社 会							1				1	1
技術家庭											1	1
体 育				3	6	1	1	2	1	3	5	1
芸 (音)												
芸 (美)							1	1				
芸 (書)												
計	5	2	0	7	12	4	4	7	2	5	10	6

られる。

### 3-4 自分の教科選好度と教師のその教科への影響度

3-3でみてきた家族の影響と同様に、もうひとつの分析軸である教師からの影響はどのようなになっているのであろうか。

#### I 関連の有無の傾向 (性別)

3-3と同様に自分の教科選好度と教師のその教科への影響度との関連をカイ 2 乗検定にて

表5 自分の教科選好と教師の影響の関連  
(男女別)

	全男子	全女子
英 語	*	*
数 学	*	
国 語		**
理 科	*	
社 会		**
技術家庭	**	*
体 育		*
芸 (音)		*
芸 (美)		
芸 (書)		

\*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$

検定したところ、全体結果は表5のように分布された。この関連にも家族の影響の場合と同様に、好きになる影響と嫌いになる影響が混在している。

家族の影響(表1)に比べて教師の影響は、関連が全体的に薄い。全体的には女子が影響を受けやすくなっている。教師の影響の場合は、理由の自由記述分析から「嫌い」になる影響が男女ともに必ず存在している。男子の場合、A校で「好き」になる影響が多く、B校に「嫌い」な影響が多いのであるが、女子の場合は、A校では「技術・家庭」と「体育」が嫌いになる影響が多く、あとの教科は「好き」である影響が多いが、B校ではどの教科も好き嫌いがほぼ同じ度合いで存在する。

有意な教科のうち、関連の強い順に並べると、

男子……技術・家庭、数学、英語、理科

女子……音楽、国語、社会、技術・家庭、体育、英語

の順となった。女子のもっとも関連の強かった「音楽」は「先生が好きだから」という理由が多かった。男子の「技術・家庭」は「先生が面白かった」という理由と、「先生が嫌い」という内容が混在していた。

## II 学校差・男女差

次に、これを学校別にみても(表6)、A校男子は関連が有意な教科がなく、女子も2教科でかつ関連も強いものが見られない。教師の影響はB校のほうが影響を受けやすいことがわかる。さらに男子は理数系、女子は文科系に偏った結果となっている。

またA校の女子の「音楽」は自由記述によれば、好きになった理由がかなり多いことによるものであった。A校の「社会」以外はほぼ嫌いになった理由を記述したものであった。

この有意な教科を関連の強い順にすると、

A校男子……なし

A校女子……音楽・社会

B校男子……技術・家庭、数学、理科

表6 自分の教科選好と教師の影響の関連（学校・男女別）

	A校男子	A校女子	B校男子	B校女子
英 語				
数 学			**	
国 語				*
理 科			*	**
社 会		*		*
技術家庭			**	**
体 育				
芸（音）		*		
芸（美）				
芸（書）				

\*  $p < 0.05$  \*\*  $p < 0.01$

B校女子……理科，技術・家庭，国語，社会

となるのであるが，A校女子は好きになる影響の多い順であるのに対し，B校女子は嫌いになる影響の多い順に並ぶという学校差が生じた。A校の「音楽」は「先生が好き」という記述が多かったが，B校の「理科」は「わからないとき，ばかにしたような言い方をするから」という蔑視に対する指摘が多く見られた。

全体としては家族の影響と同様に，女子に関連が多く見られた。

### Ⅲ 好きにさせる影響か嫌いにさせる影響か

教師の影響は，「好きになった」影響も「嫌いになった」影響も主に2つに分類することができる。

#### ・好きになった場合

教師自身の影響……「先生がいい人だから」「面白い人だから」「好きだから」など  
授業や教え方の影響……「わかりやすかった」「授業が面白かった」「わかるまで教えてくれた」「努力を評価してくれた」など

#### ・嫌いになった場合

教師自身の影響……「とにかく嫌い」「態度や接し方がいや」など  
授業や教え方の影響……「わからなくなった」「つまらない」「授業で評価してくれない」「下手」など

以上の分類の結果を表7，8にまとめた。

教師の影響を受けて好きになる場合は「授業や教え方がよい」場合が多く，嫌いになる場合は，「教師自身を嫌って教科も嫌いになる」傾向があるようである。

教師自身を好きになった（嫌いになった）のと，授業や教え方を好き（嫌い）になるのではどちらが先かわからないが，両方あげた者も多かった。教師を好きならば授業も聴く気になり，教え方のよい教師には好意を感じることは自然であろう。これは嫌いな場合も同様である。

表7 教師の影響 項目数（好きになった）（個）

	教師自身	授業・教え方	その他	合計
A校男子	11	23	3	37
A校女子	35	46	0	81
B校男子	23	16	3	42
B校女子	18	30	1	49
合計	87	115	7	209

表8 教師の影響 項目数（嫌いになった）（個）

	教師自身	授業・教え方	その他	合計
A校男子	10	10	0	20
A校女子	33	18	0	51
B校男子	42	18	3	63
B校女子	47	39	3	89
合計	132	85	6	223

男女で違いのあった内容には、男子には「とにかく嫌い」という意味での「むかつく」という表現がしばしばみられた（B校）が、一方女子は「怖い」という教師への怯えの言葉がみられる程度の違いであった。

全体的に教師の影響は家族の影響に比べて教師さえ交代すれば状況が変わる、表面的な影響が多かったといえる。

ただし、決して教師の影響は悪いばかりではない。表7、8の項目数えでは、教え方と教師を理由に挙げたものは2人（2つ）としてカウントしているが、実数は1人である。実数で回答を数えると、教科を好きになった理由として教師を挙げた者は嫌いとは挙げたものと同様またはそれ以上であり、教師のよい影響も大いに見られている。

## 4. ま と め

### 4-1 家族の影響

「家族員が家庭内の普段の生活から教科に関連する基礎や応用となる働きかけを意識的・無意識的を問わず、継続的に行うことによって子どもは関連教科を好きになる、または嫌いになる」という仮説を立てたが、家族の影響と子ども（生徒）の教科の選好に関連が大きく見られた。ゆえに生徒の教科の選好への家族の影響があるという仮説は認められた。

親や兄弟が直接その教科を教えるという基礎的な行動をしたり、または自分の趣味である教科に関することの楽しみを一緒に行うことによって教えるという、意識的・無意識的な教科の応用を行うことがよい影響を与えている。一方、親や兄弟が教科に対して否定的な発言や行動をすると、その教科に対してそのようなものであるという潜在的な苦手意識を形成し、嫌いにさせる影響も与えている例も認められた。

男子と女子では、女子がプラスマイナスどちらにも影響を受けやすい傾向があるが、全体的に男女とも家族の影響は教科を好きにさせる影響を与えているといえる。

また、親と子どもの性別の関係は、男子は父親、女子は母親の影響を受けやすい傾向があった。小さい子どもの養育に母親の影響がよく問題にされるが、高校生にまで成長すると同性同士のほうが刺激しあうようである。親子間では同一視とモデリングが原因とされることが多いが、今回の調査では家族間での同一視は、ほとんどが年下の者が年上の者に憧れたり真似をしたがるといったきょうだい間で起こっており、親子間では同一視による教科への影響については特に見られなかった。

家族というものは、基本的に構成員が変わることはない。また家族の中では自分を建前で通す必要もあまりない。ゆえに、家族に初めて接する物事を教えてもらったり、わからないことを教えてもらうのには外（家庭外）で他人に教えてもらうよりも抵抗や恥ずかしさが少なく済むために嫌いになる影響例が少なかったのではないだろうか。

また、家庭内では学校のような教授基準がないために、一人ひとりの子ども（生徒）に応じた教え方が可能であり、かつ生活の中で趣味から発展した事柄は「勉強」というプレッシャーを感じさせないのではないか。家庭内での行動は毎日の中で繰り返し行われるから、自然に定着しやすいと考えられる。

家族の影響の場合、教師の場合と異なり家族員自身への好き嫌いが直接教科の選好に影響することはほとんど認められなかった。家族からはより具体的な影響が見られたのが特徴であったとも言える。

学力レベルとしては、進学校の生徒には主要5教科とよばれる科目に影響が多く見られ、中堅校には実技教科と呼ばれる科目に影響が多く見られたこと、そして進学校の生徒のほうが家族の影響を多く受けていたことから考えると、家族が高校入学までに日々影響をあたえてきた結果、生徒の試験科目への関心を高め、学習意欲を喚起し、学習に取り組みやすくなったために学習が進んだ結果として試験結果が向上し、進学校への進学といった結果に結びついたのではないかと予測できるのではないだろうか。好きな教科が増えることは必ずしも得意な教科が増えることではないが、半数近くは好きな教科=得意な教科であったことから、また大好きではなくても興味をもっていることは、学習での準備教育ができていない状態を作っていることにつながり、飽きずに学習を続ける傾向が進学校の生徒よりも強く見られたことから効果も期待できるものであると考えられよう。

#### 4-2 教師の影響

「教師の教え方や教師への好意・同一視からその教科を好きになる、または教え方や教師自身に反感や嫌悪感を抱き、嫌いになる」という仮説を立てたが、教師の影響と子ども（生徒）の教科の選好に関連が見られた。しかし、家族の影響に比べると影響全体が少ない上に「嫌い」になる影響が多く、関連も弱いものであった。全体として女子に影響が多く見られた。

教師の影響そのものは、教え方によるものと教師自身への好き嫌いが問題であった。しかし、教師に対する同一視（憧れやその人のようになりたいと思う）は全体でも4件しかみられず、同一視というよりも、好意を持つことによってその教科の授業を抵抗なく聴ける、積極的に授業に参加できるというものであった。

傾向として、「好き」になる影響には「教え方」が、「嫌い」になる影響には「教師自身」が要因であった。おそらく、「好き」になった者はすでに教師自身にも好意を持っており、逆に「嫌い」な者は教師を嫌う段階で関心がとまってしまい、教え方の問題まで踏み込む余地がないのではないかと推測される。

教師の影響は家族と違い、教師さえ変われば解決する問題（影響）も多い。「先生が嫌い」「この先生のおかげ」と答えたものがこれに該当する。

好意を持たれた教師は、人柄がよく、親身になって教え、生徒が何かを達成できたときにはそれなりに十分な評価を与える教師であった。嫌われた教師は、差別をしたり、ばかにしたり、むやみに怒ったりなど生徒の自尊心を傷つける教師であった。

教師の影響というと、一般に「どのような授業を行ったらよいか」というような内容に注目しがちであるが、生徒が一番見て影響を受けているのは、能力主義に走らず、失敗や理解の遅いことをばかにしないといった教師の態度と、教科の魅力を熱心に伝えるといった専門に通じている姿である。

家族の影響に比べて、教師の影響はやや表面的な事柄が多かったのが特徴であった。

また、学力レベル的には、進学校よりも中堅校のほうが教師の影響を多く受けていたことから、家族の選好に対するよい影響を比較的にうけにくかった中堅校の生徒にこそ教科の魅力を伝える大人となるべきであり、また自尊心を傷つけるような発言も多くなりがちであると想像されるので態度に注意を払い、教師として人間的な親和度を上げることが全体の学力向上や学習内容への関心の喚起の第一歩であると考えられる。

実際に中堅校の生徒のほうが、教師の影響でも嫌いになってしまった理由を挙げる者が多かったことから、今まで比較的嫌いになってしまうような影響を受けがちで、教科に対する興味も失って学習から離れてしまったことが学力差の一要因になっているとはいえないだろうか。もちろん、学校の生徒といっても一律ではないので、全員がそうであるというわけではないが、一説として加えておきたい。

#### 4-3 教科の影響

「教科自身の特徴（解答がひとつである、解く楽しみなど）により、その教科に惹かれて好きになる、または嫌いになる」という仮説に基づく教科自身の影響であるが、これは1、2との並行処理で調査したために量的な分析は行っていないが、理由自由記述より、楽しい・面白いなど誰の影響ともいえないが教科に対して感じること（惹かれる理由）を挙げる者と自分のミスや努力不足など自分の中の原因を挙げる者がいた。

前者は教科の特徴によるものといっていだろうが、誰がこのように楽しく・面白く学習できる状況を作ったのかわかると、家族や教師の影響が見られる可能性も秘めているといえよう。また、「昔から好きだった」「得意だから」を理由としてあげた者は家族や教師の影響を無意識に受けている可能性があると考えられる。

純粋に教科の持つ面白さで惹かれる者、または教科の持つ特性に困る者がどれぐらいいるのかは、今回の調査では断言するのは難しいため、今後の課題としたい。

以上のように、家族と教師の影響は、家族がより教科を好きにさせる影響を与えていること、家族よりも教師のほうが表面的に教科を好きにも嫌いにもさせる影響があること、性別で影響を受けやすい家族、教師の差があること、学力差への発展などを認めることが

できた。教科の選好を学校教育のせいばかりではなく、好影響であった結果はより環境を整え、悪影響の傾向が見られた結果は留意して教育できるよう、これらの結果を今後の教科教育へ生かすべく発展させたい。また、これまで以上に、親の発言や日常生活の重要性に目を向けるべきであろう。

### 引用文献

- 1) 湯川隆子「中学生の家庭科学習への動機付け要因としての家庭科教師への同一視」『日本家庭科教育学会誌』第34巻第2号(1990) pp. 1-7  
湯川隆子「家庭科の学習への動機づけ要因としての同一視」『日本家庭科教育学会誌』第31巻第3号(1987)
- 2) 河野義章「教師の親和的手がかりが子どもの学習に及ぼす効果」『教育心理学研究』第36巻第2号(1988) pp. 161-165
- 3) 東洋, 柏木恵子, R. D. ヘス『母親の態度・行動と子どもの知的発達 日米比較研究』東京大学出版会(1981)

### 参考文献

- 有馬道久「大学生の職業選択・決定に及ぼす他者からの影響」『広島大学教育学部紀要』第1部, 第34号(1986)
- 今泉信人, 山口修司「子どもの発達動機と父親, 母親との日常的相互交渉との関連の検討」『広島大学教育学部紀要』第1部, 第37号(1988)
- 今泉信人「子どもの達成動機と子どもの達成行動に対する父親と母親の対処行動との関連に関する研究」『広島大学教育学部紀要』第1部, 第39号(1991)
- 速水敏彦「子どもの学業成績に対する教師の原因帰属と教授行動との関係」『教育心理学研究』第31巻, 第4号(1983)
- 速水俊彦「学業成績についての原因帰属の推測過程の発達」『教育心理学研究』第32巻, 第4号(1984)

(生活科学部 生活社会学科)